

大航海時代のスポーツ : コバルピアス宝典(1611) のペロタ球戯

著者	竹谷 和之
雑誌名	神戸外大論叢
巻	49
号	1
ページ	75-96
発行年	1998-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001544/



大航海時代のスポーツ

—— コバルビアス宝典 (1611) のペロタ球戯 ——

竹谷和之

はじめに

スペインにおける最初の西々辞書として、また西洋初の単一言語辞典として知られているコバルビアス宝典 “Tesoro” de Covarrubias は、語彙や語義、語源などの本来の辞典の説明のほかに、歴史及び当時の習慣や習俗、格言などを豊富に取り入れられており、さながら「事典」の様相を呈している。またスペイン語辞書の権威として有名な Real Academia Española 6 巻 (1726~39) は、コバルビアス宝典出版よりも100年以上も待たねばならないのである。⁽¹⁾ この時期は「太陽が沈まない国」としてスペインが世界にその覇権を示していた時期、いわゆる大航海時代と重なる。⁽²⁾ この時代の国内の事情をいち早く理解する資料としてこの宝典をあげることができよう。コバルビアスが生活していた時代及びその社会的背景が直截に表現されていると言っても過言ではないからである。

本研究では大航海時代と呼ばれる15世紀から17世紀にかけてのスペイン・スポーツについて論究しようとしている。当時のスポーツ研究は、現在わが国においてはほとんど手がつけられておらず未開拓の分野である。⁽³⁾ このスポーツ研究に先鞭をつける意味でこのコバルビアス宝典を最初にした。宝典ではいくつかの近代スポーツの原型、例えば九柱戯、クロッケー、ホッケー、フェンシング、などが取り上げられているが、とくにボールゲームであるペロタ pelota は、当時ヨーロッパで普及していたテニス球戯との関係を見る上で重要な位置にある。さらに「新大陸発見」以後に生じる文化伝播をみるうえでもペロタは重要な存在である。その最初として、当時のスペイン王侯貴族

に普及していたスポーツ、ペロタをとりわけコバルビアスを通して論及してみようと思う。その理由として、コバルビアスはペロタの説明にことのほか詳しく、さらにプレイヤーとして経験することによってはじめて理解できる事柄についても言及しているからである。

また、バスケットボールであるといわれているペロタ・バスケットボール以外にもスペインで普及していたボールゲームを見ることにより、当時の「ペロタ⁽⁴⁾」といわれるボールゲームの広がり及び内容がある程度明確になるものと思われる。

本研究で使用するコバルビアス宝典は、1611年マドリッドで出版され、1674年ベニート・レミヒオ・ノイデンスが増補した。それをバルセロナ大学マルティン・デ・リケールによって編纂されバルセロナにおいて出版された1943年版を使用する；

Sebastián de Covarrubias, *Tesoro de la Lengua Castellana o Española*, S. A. Horta, I. E., Barcelona, 1943.

I コバルビアス略歴

セバスティアン・デ・コバルビアス・オロスコは1539年トレドにおいて、父ドン・セバスティアン・オロスコ及び母ドニャ・マリア・バレロ・デ・コバルビアスの間に生まれた。父は高名な叙事詩人であり、母方は当時のスペインの政治や学問を代表する家系にあたる。特に母親の叔父にあたるドン・フアン・デ・コバルビアスはセバスティアンの教育を請負った。また、母の従兄弟には1574年のトレント公会議の重要人物や神学教授などがおり、コバルビアスの環境は整っていたことになる。

1539 トレドで生まれる

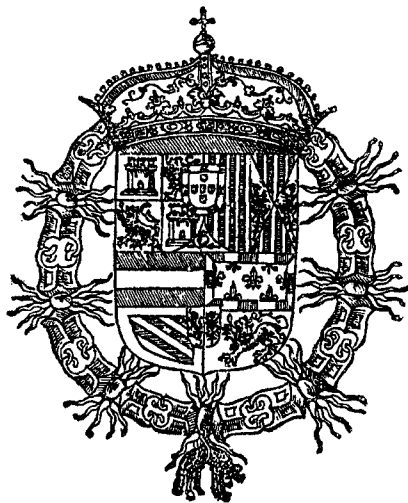
1565～1571 サラマンカ大学で勉学

1567 司祭 (sacerdote) に就任。 宮廷にいる間、フェリペ 2 世の息子フェルナンドの家庭教師となる。

TESORO
DE LA LENGVA
CASTELLANA, O
ESP A Ñ O L A.

COMPUESTO POR EL LICENCIADO
*Don Sebastian de Cobarruias Orozco, Capellan de su Magestad,
Maestre escuela y Canonigo de la santa Iglesia de Cuenca,
y Confesor del santo Oficio de la Inquisicion.*

DIRIGIDO A LA MAGESTAD CATOLICA
del Rey Don Felipe III. nuestro señor.



CON PRIVILEGIO.
En Madrid, por Luis Sanchez, impressor del Rey N S.

Año del Señor, M. DC. XI.

- 1578 国王の礼拝堂付き司祭 (capellán)
法王グレゴリウス13世の認可によりクエンカの司教座聖堂
参事会委員 (canonicato)
- 1579 クエンカ在住
- 1579, 7, 27. クエンカ大聖堂司教座参事会により司教座聖堂参事会委員
に任命
- 1581, 7. クエンカ司教ロドリゴ・デ・カストロの補佐
- 1596 教皇の使者 (バレンシアのモリスコ教育計画の遂行の為)
- 1596 バレンシア在住 (～1600)
- 1601 クエンカ大聖堂の神学教授
- 1606, 10. 司教座参事会 (cabildo) の許可によりバレンシアへ戻る
- 1607 宝典を書き始める
- 1610 道德律 (Emblemas morales) 及び宝典 (Tesoro) を書
き上げる
- 1611 宝典 (Tesoro) の出版
- 1613, 10, 8. 死亡

以上の略歴から聖職者と研究者の双方で活躍していたことに注目される。とくにスペイン王の皇太子フェルナンドの家庭教師として抜擢されるほどの知識人であり、聖職者としても重要な役職に就き、仕事をこなしていたことから、コバルビアスの接触していた環境は当時の高位聖職者や知識階級のそれと同等であったといえるであろう。

Ⅱ テニス球戯史にみるスペインのペロタ

ギルマイスターの「テニスの文化史 (*Kulturgeschichte des Tennis*)、1990年⁽⁵⁾」によると、スペイン人がテニスをする最初の事例として、1494年の記述に言及している。そこでは、イングランドのヘンリー 7 世の会計簿に、

「スペインのテニス・プレイヤーに4ポンドの支払い」とある。その後の記述に、後期中世にヤニック・ノアというバスク人がテニスで活躍していたという箇所も見受けられる。つまり王侯・貴族の人たちとプレーできるバスク人ということであろう。そして、イングランドのテニスとスペインのそれとの相違はほとんどなかったのではないかという意見を述べている。このことから15～16世紀にはすでにスペインで「ペロタ」と呼ばれるボールゲームがプレーされていたと理解できよう。そして、バ



図2：セバスティアン・デ・コバルビアス

スクの最初の資料として、フランス・バスクのガリ Garris にある1629年を指摘している。これに関しては、拙著『テニス球戯史研究とペロタ・バスカ⁽⁶⁾』で言及していおいたので詳述しないが、スペインの重要資料を見逃しているギルマイスターにとっては、推測の域を出ない発言である。

確かにバスク地方のペロタは、バスク民族の歴史において不明な部分が多くあるものの、「発祥」といわれるほど多くの種目が伝承されている。これは古いヨーロッパにあったものがバスクに残存しているというバスク人の謙虚な表現は別として、素手 (mano) へのこだわりが中世以来の形態を目の当たりにさせてくれるのである。そして、テニス球戯史では文献だけでしか確認できない形態が実際にバスクで継承されているという驚きに対して、ユーロセントリズムによる歴史記述に再生産されるという考えに行き着くまでにはそう時間はかからないのである。オリャキンディアは15、16及び17世紀にはスペイン全土でペロタが知られていたし、プレーされていたという。⁽⁷⁾

このペロタがテニス球戯であれば、15世紀にイングランド王と試合が可能である。ここでは15世紀初期にまで遡ることはできないので、コバルピアスが生きた15世紀半ば～16世紀初期のペロタについて言及する。

Ⅲ コバルピアス宝典のペロタ

コバルピアスがペロタについて説明する語彙及び内容から始めよう。それはどのようにペロタを見ていたか、または接していたかが直接的に叙述されているからである。⁽⁸⁾さらに当時のペロタをより顕在化するために、現在のペロタについての最高の文献 *El gran libro de la pelota, Tomo I, II* (1976) を参考にする。したがって宝典の語彙の説明を訳し、その後解説を加えていくことにする。まず初めに用具・施設、次いでルールに分けて進める。

1. 用具・施設に関する語彙

pelota (ペロタ)

「よく知られた遊び道具。幾種類ものボールがあり、毛を詰めたものが一般的であり、そこからこの名前が付けられた。球形で、4つの部分から成る。このボールでトリンケテ (trinquete) ゲームが行われる。それゆえ、トリゴナル (trigonal) と呼ばれ、紐の上を通過する軽いボールである。これは宮廷の球戯で、素手でゲームされていた。機敏さや敏捷性を要求されるゆえ若者を対象としたゲームである。

もう一つはデ・ビエント (風のように速い) というボールで、フォリス (follis) と呼ばれた、これは通りや長い回廊のような広い空間で使用された。

三番目は、バガニカ (pagánica), 異端、で村の住人たちが使用していた羽が詰められたボールである。

四番目は、アルパッソまたはアルパスト (harpasso, harpasto) である。これはチュエカ (chueca; ホッケーに似た球戯) で使用された。コートを区切り、各コートに得点を設定し、ピナ (丸い境界石で先を尖らせて建ててあ

る)をつくり、相手のピナ pina (頂華：アーチ状に丸く縁取られた出入口)の間にアルパッソを通過させると得点になる。ボールを奪った者が走る；相手チームは格闘 lucha になるまで奪い返そうとする。

この異なるボールについてはマルクス・アウレリウスがエピグラム (epigramas) で言及している；lib. 7, epigr. 71。⁽⁹⁾

ノイデンスの附加；ペロタ・ゲームから次の警句が現われ出た

Soy una hembra preñada	私は身重の女
Que quiento más de mil faltas,	数多くの間違い (falta) をしたけど
Bastando nueve ; ando hinchada,	今度は9つで充分；妊娠してるから、
Tráenme baxa y levantada ;	足台を持ってきて私を立たせておく
	れ；

Me ves por las partes altas. 私がよく見えるでしょ。

通常妊娠した女性は、出産するためには9回以上の無月経である(夫が死去した場合、法律によって10ヶ月貞操を守り家庭の相続を所望するなら、10回の月経を命じた、しかしピッポクラテスは期間をもっと長くとっているのだが)のは確かだが、ボールはゲームで数え切れないほどフォールト falta を繰り返す。空気を入れられ、地面を転がされ、最も贅沢極まりなく遊ばれる。」

この説明からボールゲームがかなり普及していたことが窺われる。宝典が出版されたのは1611年であるが、コバルビアスが幼少の頃以来このペロタ・ゲームをしていたことは疑い得ない。注目されるのは、マルクス・アウレリウスの述べたボール4種類が引用されていることである。ローマ時代から17世紀まで、この4種類が伝承されてきたといえようか。しかし現在では、この継続性についての確認はできない。

また、ペロタの中身が毛 pelo で詰められ、トリンケットで使用されてい

たとなると、その当時はいわゆる詰め球が一般的であったことになる。毛といっても犬か羊か、人間か判別しがたいが、ボール供給をスムーズに行うボール職人の存在が注目される。詰め球は当時流行していたボールと考えて差し支えないであろう。現在のペロタ・バスカでは、綿やラテックスを糸で巻き、適切な大きさにされる。つまり、巻き球であることから、現在と当時の形態と区別しなければならない。

また、「ペロタ」はボールゲームを総称する名称にも用いられている。活用例として最後に取り上げられている“el juego de pelota”という表現は、当時では種目限定を意味するからである。

pelotero (ペロテロ)

「ボールを渡す人。理髪職人。」

この「ボールを渡す人」というのは、テニス球戯初期のボールを投げる人を意味するサーバー (servant) と呼んでいた頃の人物と関係がある。つまり主人が打ちやすいボールを投げる使用人である。現在この単語はボール職人に該当し、ボール製作に携わる人をいう。

raqueta (ラケット)

「フランス語 raquet である。私は raca というヘブライ語起源であると思う。extendere はネットのヒモを張った状態をいう。」

フランスの貴族や上流階級の間で普及していたジュ・ド・ポームとの関係からか、ラケットがスペインでも使用されていたようである。このラケットがどのような形状なのかは明確でない。*El gran libro*⁽¹⁰⁾ でもロング・ポームやクルト・ポームなどの対面球戯で使用されていたとし、ペロタ・バスカでは混成のゲーム (壁に打ち返す) で使用されるとしている。

Pala (パラ)

「ボールを打つ用具。」

現在ではもう少し説明が加えられ、木製の、長い、特別の形をした用具とされる。競技名でもある。

Paleta (パレタ)

「小さいパラ、これを使用してクロッケー (argolla) をする。・・・」
現在パレタは、ペロタの1種目であるが、当時はこのような球戯ではなく、クロッケーの用具として一般的であった。

用具は主として素手、パラ及びラケットである。このことから当時の用具としてこの3種類が一般的であったようである。バスク地方で現在使用されている用具と比較すると基本的な用具は合致するが、バスク特有のという用具はもっと後年になってから、つまり18～19世紀に入ってから使用されることになる。

また現在使用されている、グアンテ guante やシャーレ xare などはバスク特有の用具であり16・17世紀には普及していなかったと思われる。

trinquete (トリンケット)

「室内のペロタ球戯、回廊の球戯。triquete ともいう。3隅を閉じ、2つが内側、1つが外側である。ここで使用されるボールはトリゴナリスやア・トリゴーン (trigonalis, a trigone) と呼ばれ、現在使用されており、ヒモの上を通過する軽いボールのことである。これは上流階級や若者のゲームで、ペロタ・デ・ピエントとは反対に、短時間に速いバウンドでボールを返球するには敏捷性が必要である。ここから pelota という動詞が生まれた。興味深いことは；トリンケテまたトリケテは3つの隅、カドを閉じたことに起因するからである。」

現在のトリンケテでのペロタは壁に交互に返球する種目と、パシャカ paxaka という対面式で中央にネットを張り、グアンテ (グローブ) をはめ、

ソフトボール大のボールを打つのである。構成は、ペントハウス、タンブール、ギャラリー、グリルである。15～16世紀当時は対面式でそれも中央にヒモが掛けてあり、その上を通過することが義務づけられていることから、パシャカに近似した形態であったと思われる。ただギャラリーなどの存在は確認できない。用具としては素手またはラケットではなかったか。

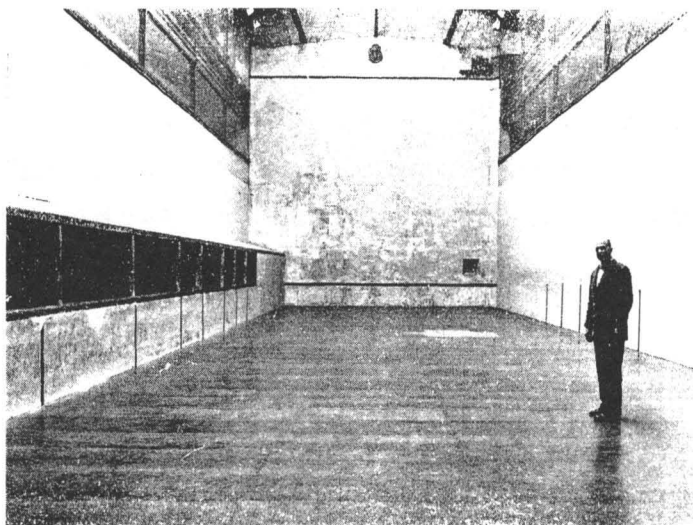


写真1：トリンケット（パイヨンヌ）

現在のペロタ・バスカにみられるプラサ plaza，フロントン frontón などは当時は存在していなかった。宝典にはペロタ・ゲームとの関係は説明されておらず、「村や都市の出入り口にあり，日用品の売買，行商人の取り決めなどをするオープン・スペースとしての機能があった。」ここでは遊戯やゲームをしたという記述は見られない。

当時のペロタは特定の場所，つまりトリンケットや回廊などでは普及していたが，一般人参加の形跡はない。ただコバルピアスが聖職者として地方に赴き，また宮廷に出入りできるほどの人物であれば，民衆レベルのペロタに

についてはあまり関心がなかったのではないか。⁽¹¹⁾

2. ルールに関する語彙

Boleo (ボレー)

「bolar から出た、地面に落下する前に、空中にあるボールを打つこと。Boleo はギリシア語の *βολεω* からきている。ボールに打撃を与えて打つからである。暗示として、あるものを中継なしに運ぶこと、多くの努力をせずに自分の望みを達成することをいう。

この語は現在ペロタ用語としては使用されていない。

Botar (バウンド; 動詞)

「ペロタのゲームでボールをバウンドさせてプレイすること。バウンドさせる、バウンドする、ボールが飛ぶこと。外に放り投げる、勢いよく捨てること、フランス語の *bouter* でもある。ヤットコで取り出せない釘をだす釘抜きを意味する。」

Bote (バウンド)

「ボールがバウンドするごとく、地面にはずむこと。」

さらに、*botiboleo* はボールが地面にバウンドする前に打ち返すノーバウンドのこと、つまり今日のボレーのことであるとする。

この二つの語は現在でも同義語として使用されている。

Cotín (バックハンド)

「肘の向きを変えながらボールを打つこと。」

つまりバックハンドのことである。バックハンドができる用具となればパラおよびラケットしかないであろう。素手の競技では両手使用が可能であり、バックハンドは必要ない。ただラケットの張力はあまり強くなかったのでは

ないか。ボールの重さによるが、現在のシャーレと同様、捕球してから投げ
るという「補・投」の身体技法が必要になる。⁽¹²⁾

rebote (リバウンド)

「ペロタ選手の用語；バウンド，リバウンド。」

現在では数種類の意味があり、打ち返す動作やバウンドのこと、混成ゲームの後方の壁をいう。

falta (フォールト)

「ペロタの失敗したときの専門用語。数多くの異なるフォールトがあり、リボンや印の上を通過しないというサーブ (servicio) の失敗，ロープの下を通過したりロープに当たったりするフォールト，梁に当たったりするフォールト，ゲームに不必要なバウンドのフォールト，ツーバウンドのフォールト，一人で2回打つフォールト，ボールを暖めるフォールト，その他は条件次第。15およびフォールトを与えることは試合をする上で有利になる。得点でゲームするとは，金を賭けることであるからである。」

このフォールトについては，ペロタの内容のみを詳細に述べられている。他の意味を意図的にカットしたのか，それとも説明する用意がなかったのかは判別できないが，驚くべきことにペロタのゲームに関する説明で終始している。この説明でいかにコバルピアスがペロタに近い存在であったか想像できよう。ここで注目に値する表現として，「ボールが梁に当たる」として，屋外の広いコートを目指すのではなく，屋内のコートを想起させる。またネットにリボンが使用されていること，ヒモから少し発展して上下の通過が判別しやすくなっていることである。さらにすぐに得点に結びつくのではなく，アドバンテージのごとく有利にゲームを展開できるルールがあったことになる。⁽¹³⁾ また，ペロタは賭の代名詞といわれていることから，この球戯には賭が不可欠であったことが証明されていることになる。⁽¹⁴⁾

Juego（遊び，ゲーム）

「人に必要な娯楽や気晴らし，労働と娯楽を区別し，新たにリフレッシュして真面目に働こうとすること。」その後，手の遊び，サイコロ遊び，ローマの円形闘技場のゲームや，ギリシアのオリンピックなどを例にあげたあと，「子供にはクロッケーなど多くの遊びがある，それらはペロタ・ゲームなどのような男の娯楽や運動である。」

注目してよいのは，例として唯一ペロタを取り上げていることと男性のスポーツであるという点である。オリャキンディアは15，16，17世紀にはこのペロタがスペイン中に普及していた，と言う。その理由として，当時を代表する作家カルデロン・デ・ラ・バルカ（1600～81），ロドリゴ・カロ（1673～1647）⁽¹⁵⁾などの作品の中にペロタが認められるとしている。

Chaça（チェイス）

「ペロタ球戯でボールを保持した地点，ボールが転がっているところや第二バウンドしたところに置く印のこと。イタリア語の汚れる（manchar）やちらす（salpicar）という意味の言葉 chiazzare や chiassare からきているという人もいる。チェイスの場所に唾を吐いたり，線を引き印をつけていた。フランス語の外へ投げるという意の chasser からきているという人もいる，チェイスそれ自体はコート内でバウンドした後，コート外へ出ることもある。グアディックス神父はアラビア語であると言い，一部は同義語であり，そこからよいチェイスは得点（15）ではなく，チェイスを獲得するチャンスができるのである。ラテン語では印という意味である。チェイス（chaça）を競う。再びゲーム（chaça）をする，など。」

2回目のバウンドしたところ，またはツーバウンドでボールを保持したところ，などは現在のバスク地方でプレイされているラシュアやレポータのルールにも見られることから，基本的なルールとしてスペインやフランスで普及していたテニス球戯であると言えよう。⁽¹⁶⁾

さらに、チェイスをマークするとき、唾をはいたり線を引いたりすることは、細かくチェイスラインがコートに引かれる以前の状態であろう。

またスカイノは『球戯論』において、チェイスについて次のように述べている；「ボールがストライカー・インかストライカー・アウトによって与えられた激しい勢いを失うか、どちらかの側によって地面上で停止されるかしたせいでボールが止まるまで続けられる。ボールが停止した場所に、一般には「チェース」として知られているある種のマークがつけられる。…ボールが打ち返されるか相手がチェースを狙ってプレーしてフォールトを犯すかが理由となって、すでにマークされているチェースを敵方の側により近づけた者が勝ちを得る。⁽¹⁷⁾」

スカイノの『球戯論』ほど詳しくは説明されていないが、「宝典」では得点の猶予を示唆する表現がなされていることから、近似したルールであったと見てよいと思われる。

その他、ペロタに関する語彙を抽出してみた。

Ambidextro (両手利き)

「両手を巧みに使用できることをいう。ラテン語の ambidexter から由来し、そこから両手を自由自在に使用できる人をいう。聖書にも両手利きに関する屈強な男を言及している。アリストテレスによれば、両手利きはまれにしか現れなくて、素手のペロタ選手は女性には見つけだすことはできず、おもに女性はラケット競技しか参加できない。」

この十数年、素手のプロでトップの座を守りつづけている、バスクの英雄フリアン・レテギ Julian Retegui は両手利きの代表である。

largo (長い)

「ラテン語の longus から来ている。カスティリア語 (スペイン語) では野原や長い道などのような広い空間をいう。遠投、長い剣、背が高い。長い

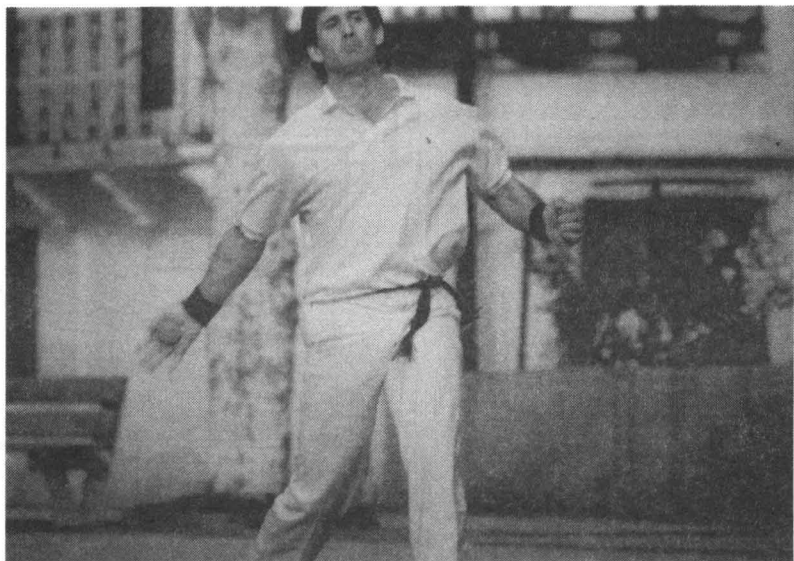


写真2：「素手」の英雄フリアン・レテギⅡ世

時間、自由な金遣いの荒い男をいう；大金を賭けて遊び、稼ぐも失うのも自由な男をいう。長さだけでなく広さも加わる。

Dar cinco de largo はボールが達しなければならない線に到達すること、それを通過しないこと。

Dar cinco de corto はボールが達しないこと。

この2つの用語は九柱戯やホッケーをするときに、ボールがオーバー(excesso)もしくはショート(falta)の時に使う。」

IV ペロタの再構成（コバルビアスのペロタ）

ここでは既に検討された語彙から当時のペロタを再現してみようと思う。
まず、ペロタがプレイされるコートについて；

もっとも大きなウエイトを占めるのは、トリンケットつまり屋内球戯場である。三面は壁に囲まれて、2面は「内向き」、1面は「外向き」という。Trinquete の Tri という語源がそのまま残存していたコートと考えられる。

内向きは建物の一部を構成する壁で、城壁または修道院などの内部とを隔てる壁として理解してよいのではないか。つまりサービス・サイドから見て左側とレシーブ・サイドの後ろの壁であり、外向きとは外との境界をなす壁つまり右側であろう。今でいうペントハウスという庇の架けられているサイドが内向きと考えられていたのではないかと思われる。

そして、中央のネットとしての紐の存在である。「紐」と呼んでいるからにはボールが引っかかり停止可能となる以前の状態、つまり通過の判別が困難なきわめて初期の状態であったと察せられる。

1632年の銅版画 Charles Hulpeau の Le lev de la paume には、ト

リンケットの中央に紐のネットが掛けられ、紐にはボールの通過が見やすくする工夫が施されている。⁽¹⁸⁾ この銅版画の約20年前の状態がコバルビアスの時代であったと思われる。

ボールはマルクス・アウレリウスの指摘する4種類が取り上げられており、当時においてはこれらのうちの1種類の詰め球が使用されていたのではないかと思われる。それは説明にもあるとおり、毛 pelo を詰めたボールのことを pelota と呼んでいたからである。その他のボールについては記述がみられないため、使用されていたのかどうかは不明である。

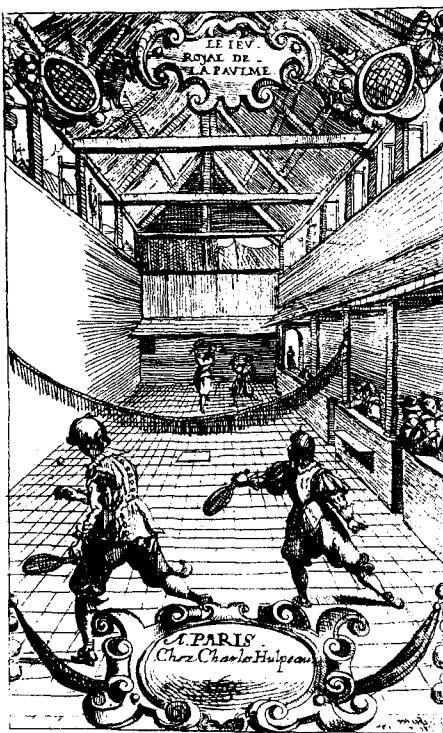


図3 : Charles Hulpeau の Le lev royal de la paume のタイトルのある銅版画 (1632年) ギルマイスター著、稲垣他訳、『テニスの文化史』、大修館書店、1993年、p.42.

用具については、素手、パラ、パレタおよびラケットの4種類が取り上げられており、当時用いられていた用具であった。ただ、ラケットの場合、その大きさ、ガットの張力、などは不明で、当時の人々にのみ理解できたものであろう。⁽¹⁹⁾ただ、王侯・貴族の人々の球戯であってみれば、おもにラケットが主流であったのではないかと思われる。これはいくつかの絵画でも確認できるように、スペインにおいても同様の状況が生じていたのではないか。



図4：ヨハネス・サンブクスの寓意画（1564年）

ギルマイスター著、稲垣他訳、『テニスの文化史』、大修館書店、1993年、p.59.

ルールに関しては、フォールトおよびチェイスの存在から、アントニオ・スカイノが1555年に書いた『球戯論』と近似している。というよりも、そのものではないかという気さえしてくる。上流階級の人々が好んでプレーした

球戯とはこの形態であった可能性が強い。

またカウント法も15という言葉を使用していることから、0、15、30、45、ゲームと推測できる。スペインにおいてもスカイノと同時代のゲームゆえに、オリャキンディアの指摘どおり、世界の各都市ではこのいわゆるヨーロッパ型ボールゲーム *pelota europea* が行われていたと思われる。

さらに、当時のカスティリア王国とナバラ王国の政治権力の関係から、ペロタ・バスカとこのペロタは同一の球戯であった可能性はきわめて高いと思われる。

ここからヨーロッパ型ボールゲームは、テニス球戯およびジュ・ド・ポームと同義語と考えると差し支えないと思われる。ノエルとクラークの『テニスの歴史』における当該宝典の時代と合致する記述として、「パリでテニスが絶頂期を迎えたのは、おそらく1600年前後のことであった。…当時パリには1800のコートがあった。」「イギリス国内においても国外においても、1600年ごろに絶頂期を迎えたであろう。…1615年にロンドンにあったコートの一覧表が保存されていた。…屋根付き、屋根無しを含めて14のコートがあった。」などに代表されるように、近代テニス以前のテニス球戯に属するボールゲームが行われていたことは注目してよい。⁽²⁰⁾ また、当時ヨーロッパ内の王侯・貴族の関係をみると当然様々な文化交流があり、その中にこのテニス球戯が存在していたとしても何の不思議もない。

まとめにかえて

スペイン最初の辞典にしてこれほど多くのペロタ用語が登場するのは、やはり著者自身がプレイし、なおかつ相当の愛好者であったということができないのではないか。著者のペロタへの思い入れが詳細な説明に端的に現れている。

コバルピアス宝典に見られるペロタは、室内おもにトリンケットや回廊で簡易ネット（紐を張った）を使用し、ボールは詰め球、用具はラケットが主

流で、パラやパレタ、素手などで行うゲームであった。ボールを出す専門の人 *pelotero* が存在し、プレイヤーはそのボールを打つことによってゲームが始まる。ルールはツーバウンド以降は、チェイスという得点ではなく、得点になる準備段階がある。このチェイスを獲得すると得点になる。さらにフォールトはルールに定められた有効球以外のボールになった状態をいう。

このことから、スペインにおいても16世紀のヨーロッパにおいて主流であった室内ボールゲームであったと思われる。

ただ限定された語彙からの再構成ゆえに、多くの不十分な箇所がある。たとえばプレイヤーの人数やサーブの有無、精確なカウント法やポイントになるルールなどである。これらが明確になることによって、他のヨーロッパ・ボールゲームとの比較が可能となる。また、ヨーロッパからアメリカ大陸への大航海時代の文化伝播を見るには、スポーツ文化は不可欠である。なぜならスポーツは、政治、経済、宗教などと密接な関係を有しているからである。これらに関しては今後の課題としたい。

追記 スペインにおける辞典に関しては、神戸市外国語大学教授 福嶋教隆先生に御教示いただいた。心から感謝いたします。

註記および引用文献

(1) コバルピアス以前のスペイン語に関する辞典は、単一言語ではなく、二言語辞典が主であった。以下の5辞典があるとされる。

1. 1490. Alfonso de Palencia, *Universal vocabulario en latín y en romance*.
初の羅西辞典

2. 1495. Antonio de Nebrija, *Vocabulario de romance en latín*.
第2の羅西辞典

1981, Transcripción e introducción de Gerald J. McDnald,
Castilla, Madrid.

3. 1570. 作者不詳, *Vocabulario de las dos lenguas de Toscana y Castilla*,
Sevilla.
初の伊西辞典

4. 1599. Pwercivale, *A dictionary in Spanish and English*.

初の英西辞典

5. 1606. Ioan Palet. *Diccionario muy copioso de las lenguas española y francesa*, Bruselas.

初の仏西辞典

1755. Samuel Johnson. *A dictionary of the English Language*, Longman, London.

初の英々辞典

- (2) 大航海時代の時代区分は、研究者によって差異が生じている。たとえば、15世紀末～17世紀中頃（増田義郎『大航海時代』講談社 1984）、1420～1620（ボイス・ベンローズ著、荒尾克己訳『大航海時代』筑摩書房 1985）、15世紀末～18世紀末（染田秀藤『大航海時代における異文化理解と他者認識』溪水社 1995）など、その時期に不一致が見られる。この時代は人、物、文化が地球的規模で流れ始めたことは確かであり、その意味では地域を限定した区分とは異なる。したがって筆者は15世紀～17世紀とする。

スペインでは一般的に「大航海時代」よりも「黄金世紀 Siglo de Oro」と呼ばれる。この用語は17世紀の作家イエズス会士バルタサル・グラシアンであったといわれている。またフランスの歴史家ベルナサルは「黄金世紀」を「スペインが政治、軍事、外交、経済、宗教、芸術、または文学において、世界を支配する役割を演じたとわれわれが回顧する時代」と定義づけている。

- (3) 「新大陸」でのスポーツについては詳しく述べられているが、いわゆるその時代のヨーロッパについての記述はみられない。

稲垣正浩、野々宮徹、寒川恒夫、谷釜了正、『図説スポーツの歴史』大修館書店、1996年。

また、「中世・ルネサンス」や「17・18世紀」などとして、スポーツ史では大航海時代として捉えられていない歴史もある。

レイモン・トマ著、蔵持不三也訳、『新版スポーツの歴史』白水社、1993年。

- (4) ここで扱う「ペロタ」はバスク地方で実施されている「ペロタ・バスカ pelota vasca」の前身とは考えていない。同一の可能性があっても、短絡的には結び付けられない複雑な歴史があるからである。慎重にすべきは「ペロタ」という単語で、その意味内容は時代、地方によって異なる。

Luiz Bombín, Bozas-Urrutia, *El gran libro de la pelota*, Tomo I, II, Deporte Universal, Madrid, 1976.

- (5) Gillmeister, H., *Kulturgeschichte des Tennis*, Wilhelm Fink Verlag, München, 1990.

稲垣正浩、奈良重幸、船井廣則訳、『テニスの文化史』大修館書店、1993年。

- (6) 竹谷和之、「テニス球戯史研究とペロタ・バスカー1331年の文書からー」、『神

戸外大論叢』, 神戸市外国語大学研究会, 第48巻第4号, 1997年, pp.47-59.

- (7) Ollaquindia, R., El juego de pelota en el “tesoro” de Covarrubias, *Cuadernos de Etnología y Etnografía de Navarra*, Numero60, 1992, pp.289-294.
- (8) コバルビナス宝典の語彙については, すでにオリャキンディアが検討しているが, テニス球戯と関連して考察してはいない。したがって本論ではテニス球戯との関連を中心に進める。ibid., 1992.
- (9) 紀元1世紀後半に活躍したマルティアリス (Valerius Martialis, M.) のエピグラム (風刺詩) はよく知られているが, 彼が現在スペインのアラゴン県カラタユー近辺の生まれであることはほとんど知られていない。エピグラムでのボールゲームについては, 主にローマでの見聞を中心であろうと推測できるが, 一方当時のイベリア半島以西におけるボールゲーム存在の可能性は残されている。マルティアリスの同時代人としてはセネカを指摘できる。両者ともローマに赴き, マルティアリスは数冊の詩集を出している。

Valerius Martialis, M., Translated by Walter C.A.Ker, *Epigrams*, William Heinemann LTD, London&Harvard University Press, Cambridge&Massachusetts, 1968. First printed 1919.

- (10) Luis Bombín, Bozas-Urrutia, 1976.
- (11) この時期フランスでは多くのコートやトリンケットでテニス球戯がプレイされていた。しかし上流階級のテニス球戯であってみれば, 事情は同じである。辻本義幸「十六世紀フランスのボーム球戯の競技規則」『神戸松蔭女子学院大学・神戸松蔭女子短期大学研究紀要』第三十九号, 1998年, pp.21-58.
- (12) 拙著「ペロタの形態に関する研究」『神戸外大論叢』神戸市外国語大学研究会, 第38巻第5号, 1987年, pp19-44.
- (13) これは後に出てくるチェイスと密接な関係がある。つまり失敗をおかすとすぐに相手チームに得点が与えられるわけではなく, 得点を保留し, その得点を獲得すべく対戦されることである。その場合, ネットとチェイスラインが重要な役目を果たす。1555年に出されたイタリアのスカイノの『球戯論』では, このフォールトをめぐる議論を解決すべく出版されたのである。ルールが整備される以前の段階では, 大なり小なりこのようなプロセスを経てきているのである。

スカイノ著, 辻本義幸訳, 「球戯論」, 表孟宏編著『テニスの源流を求めて』大修館書店, 1997年, pp.215-444.

- (14) これはテニスのカウントと関係がある。15というカウント法は, 当時ヨーロッパで使用されていた60進法の残存説である。得点毎に15相当の銅貨を賭けていたとも言われている。例えば, 14世紀フランスでは, 当時のドゥニエ銅貨が60スウの4分の1, すなわち15スウであった。岸野雄三代表編集, 『最新スポー

ツ大事典』大修館書店、1987年。

- (15) Ollaquindia, 1992, p290.
- (16) チェイスの特徴は、コート内でツーバウンドした地点またはツーバウンドして転がりつづけるボールを止めた地点、ワンバウンドしたボールがコート外へでたサイドライン上、などいくつかのルールがある。これはあらかじめチェイスラインを引いておくのではなく、マーキングされることである。このルールは現在バスク地方でプレーされているラシユア *laxoa* やレボーテ *rebote* のルールと近似している。しかしこのラシユアにはネットはなく、屋外の広いコート (80m×20m) を使用してチェイスをマークすることから、古い形態が残存していることになる。屋内ルールの発展形態では、床にすでにチェイスラインが引かれているからである。
- (17) スカイノ著、辻本義幸訳、「球戯論」、1997年。
- (18) ネットと呼ばれ始めたのはいつ頃か判明しないが、この紐という名称に相当する図としてはヨハネス・サンブクスの寓意画がある。
ギルマイスター著、稲垣正浩、奈良重幸、船井廣則訳、『テニスの文化史』、大修館書店、1993年、p.59。
- (19) *ibid.* p42。
- (20) ノーエル、クラーク著、勝山吉和訳、「テニスの歴史 (抄)」、表孟宏編著『テニスの源流を求めて』大修館書店、1997年、pp.113-170。